

# イメージの停滞からの脱出

——イメージとしての身体を実感する——

教材 「左の手」(花岡大学)

長 浜 博

不慮の事故で左手を失った鶴次郎は、その「目に見えない手」をただの錯覚ではない実感として感じ取りたくましく生きていこうとする。子どもたちも、この「イメージとしての手」を感じ取り、自身のイメージとしての身体を実感することができるのではないだろうか。

1. 実施日 平成二十六年十二月二十六日

2. 実施校 静岡県伊豆市立天城小学校

六年一組

3. 授業の照準

〈六年生という発達段階〉

思春期になると、自分のイメージ世界を保ちながらも、さまざまな現実と直面し、その生活の中で蓄積されてきた常識に縛られてしまいうことが多くなる。いろいろな見方・考え

方ができる視野の広さを持ち合わせているはずなのだが、自分の純粋なイメージ活動と現実とのギャップに悩む時期だとも言える。最近、「心が折れやすい」とか「挑戦しない」とか言われるのも、思春期の子供たちから表現されているのではないかと思われるのだが、どちらも、直面した現実をそのまま受け止め、その限界を越えられないために生まれる現象ではないだろうか。

〈人間のイメージ活動のたくましさ〉

人間は本来、豊かなイメージ世界を持つていて、「火事場の馬鹿力」の例を挙げるまでもなく、目に見えない世界を信じることで、普通では出せない力を発揮したり、苦しく辛い場面を耐えたり乗り越えたり、現実はそのでないのに幸せな気分になったりすることがある。人間の持つイメージ活動の豊かさは、人間が生きるたくましさの原動力とも言えるのである。

〈教材の魅力〉

教材「左の手」の主人公鶴次郎は、不慮の事故で片腕を失い、不幸のどん底にある。しかし、鶴次郎は、その不幸を不幸とせず、イメージのままに、現実的にはありえない手があると実感し、決して夢を失わない。もしここで現実だけを見たら、鶴次郎は、「見えない手」を失い、単に道具としての「手」だけを持つことになり、生きる活力を失うかもしれない。だからこそ、ここでは、単なる現実逃避をする夢想家として割り切ることのできない、人間の生命の不思議さ、崇高さを感じ取る。そして、その生命を支えているのは、まさにイメージ活動である。それは、「目に見えない手」を実感するということで象徴される。子どもたちが、どこまで、この実感にせまることができるのか。それは、六年生の子どもたちにとって、現実の壁を乗り越えるための成長課題だとも言える。なお、本教材は、花岡大学著作の「左の手」を原典とし、

授業のために、一部を抜粋し、教材化処理をしている。

### 〈ラバーハンド実験の意味〉

「現実の手」と「架空（模型）の手」。その二つを並べて架空の手をくすぐると、くすぐられていない現実の手がくすぐられているように感じる。そんな実験がある。作り物である手の模型に自分の感覚が移ってしまうと言ってもよい。ラバーハンド実験と言われるもので、錯覚であり、すべての人間に通用するわけではないが、錯覚ということでは片づけられない「実感（そうとしか感じられない感覚）」が伴う実験である。この実験を授業前の準備運動として行なった。自分が「これが本物だ」と思っていたものが「違っていた」ことを実感させることで、固定概念くずしと意識の転換をはかりたいと思ったからである。今回行ったところ、程度の差はあったが、十九人中四人が、感覚が移ったことを訴えた。

### 教材「左の手」（花岡大学）

——「うろこ雲」所収 実業の日本社——

1 ハツと気がついた時は、もう何をするひまもなかった。風を切って走ってきたトラックは、鶴次郎の小さな体を激しく地面

にたたきつけ、その左手をペチャンコにつぶしてしまった。かつぎこまれた港町の病院の真っ白な部屋の中で、鶴次郎はうわごとを言った。蒸し暑い日が続いて、鶴次郎の手はじくじくとくさり始めた。母は、その手の指先をそつとなでながら、子供のように肩をゆすぶって泣いた。唇をかみしめてだまっていた父は、やがて院長さんのところへ行つて、

「命にかえられませんから、おたのみいたします。」

と言つて頭を下げた。

その翌日、鶴次郎の左の手は、ほとんど肩のつけねのところから切り落とされた。病院の窓からは、海が一目に見えた。田んぼの草取りや、梨づくりの仕事がいそがしくなつて、母も家へ帰ってしまった。鶴次郎は一人になると、ベッドの上にすわつて、一日中海ばかり見て暮らした。

### 2

さわってみると、左の手はたしかにないが、自分ではやっぱりちゃんとあるようにしか思えない。目をつむつてやってみると、五本の指だつて思うように動かせるし、ジャンケンだつて自由にできる。大きな山アリなども、ごそごそはいあがつてくることもあったし、時には力が止まって血を吸うことさえあるのだ。

### 3

「おれの手はなくなつたのと違う。ただ空気のように、見たりさわったりできなくなつただけじゃないかしら？」

と、鶴次郎は思った。看護婦さんにその話をする、看護婦さんは、いきなりキンモクセイのような甘いにおいのする胸に鶴次郎を抱きよせて、

「ええ、そうよ。目に見えない手がちゃんとあるんだわ。きっとそれは、神様のようないやな手に違いないわ。ね、その手を大事にしないさいね。」

と言つた。神様のようないやな手とは、どういうことだろう。かなり強い潮風が、窓いっぱいにはふきこんでくる、ある朝のことだった。スイミットウのかごをさげたまさちよが、まじめな顔をして鶴次郎の病室へ入つて来た。しばらく、二人ともだまつて笑つてばかりいた。それからまさちよは、おばあにたのまれたとおり、スイミットウのゴムのようにうすい皮を上手にむいて、鶴次郎に食べさせた。

鶴次郎は、おばあのをしわまみれの顔を思い出しながら、

「うまいな、とてもうまいな。」

と言つて食べた。看護婦さんが言つていたとおり、まもなく真っ白にぬつたきれいな外国の船が、汽笛を鳴らしながら静かに港

に入ってきた。鶴次郎は、それを見ると、にわかにいきいきとおを輝かせて、

「おれはな、大きくなったら、あんな立派な船の船員になるつもりや。」

と言った。それから、

「そうなたら、船にのせて、みんなを好きな所へ連れて行ってやる。さちよも、おばあも…。いや、待てよ、おばあは年寄りだから、船にようかしれんな。こいつあ、困ったな。」

と言って、鶴次郎は、たいそう困ったように、しきりと頭をふった。さちよは、きりと下がつているシャツの片腕が、潮風がふきこんでくるたびにひらひら動くのを、じっと見つめてだまっていた。鶴次郎は、その目をちらつと見て、さちよが何を心配しているのかがすぐわかった。それで、につこり笑いながら、(言った。)

4 心配するな。おれの手は、そら、ちゃんと、こんなにあるんだよ。」

と言うふうには、その目に見えない手を、さちよの方へ差し出した。そして、さちよのオカッパ頭をそつとなでてやったのである。すると左の手のひらに、さちよの髪の毛が、心にしみるように、しかと感じられた。

#### 4. 指導計画（一時間扱い）

##### 5. 本時の目標

イメージとしての身体を実感することを通して、イメージ世界の実在を確認し、イメージの停滞から脱出することができる。

##### 6. 本時の展開

学習活動	留意点
<ul style="list-style-type: none"><li>*ラバーハンド実験</li><li>●あいさつ</li><li>●物語を読んで考える。(本文1)</li><li>一日中、海ばかり見てくらしした鶴次郎は、どんなことを思っていたでしょう。</li><li>●左手がなくなってしまうて悲しい。</li><li>●左手がなくなってしまうて、何もできなくなった。</li><li>●続きを読んで考える。(本文2)</li><li>鶴次郎は、心の中どんなことをつぶやいたでしょう。</li><li>●なくなつた手がジャンケンするわけない。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>*既成概念からの解放</li><li>●本文1を渡す。</li><li>●ワークシートに書きこみ、発表させる。</li><li>●鶴次郎の心の中を想像し、自由に書かせる。</li><li>●子どもの意識が、時間・空間・人間などのいずれに分類されるかをつかむ。</li><li>●板書で分類・提示する</li><li>●本文2を渡す。</li><li>●グループで話し合い、発表させる。</li><li>●イメージとしての身体を感じる子がいるかどうかを確かめる。</li><li>●子どもの意見を一つにまとめない。</li></ul>

● 本当の手はなくなつたけど、感覚は残っているんだ。

● 続きを読んで考える。(本文3)

① 鶴次郎、看護婦、さちよの思いを考え、発表する。

② 『それで、につこり笑いながら』の続きを書きましょう。

● 「さちよ、俺の手はあるよ」と言つた。

● 「お前の心配は必要ないよ」と言つた。

● さちよと手をつないだ。

● 続きを読んで考える。(本文4)

「しとかと感じられた」とは、どういうことでしょう。

● 実際の手では感じられないけど、心の手でさちよの髪の毛を感じた。

● 教師の話聞く。

● 本文3を渡す。

● ワークシートに書き込み、発表させる。

● イメージ世界の実在を確認しているかどうかを確かめる。

● 本文4は提示するだけとし、授業後に全文を渡す。

● イメージとしての左手を実感することができているか確認する。

● 今日の授業のねらいなどを確認させる。

#### 7. 授業記録

宮田 とにかく「何を答えたらいいのかな」とか考えないで、自分の心に素直に語って



中川 まいさんの言葉は「現実を受け止めたくない」ってことなんじゃないか、っていうことよね。

みお 想像だけど…幻覚でも何でもいいから左手はあって欲しいなって。

ゆう 本当に左手はなくなっちゃったのかなー。

さき えーと、話しているのを聞いていて、なんか、目をつぶって、っていう言葉が出ていた気がして、その時は目を開いて見ていたりすると、左手がないのは目で見えるから、「ああ、ない。」ってなっちゃうけど、目をつぶっていたら、昔、蚊に刺されたり、じゃんけんしたりとかの感覚が…なんていうか…甦ってきて思い出せるのかわかって。

宮田 目を開いているよりもつぶっている方が感覚が鮮やかに戻ってくるんじゃないか、っていうことだね。現実逃避についてどう思う？

さき 左手がなくなっちゃったことを受け止めたくないから…。

宮田 それが現実逃避だよ。そしてそれに對してさっき、目をつぶると、つてしゃべっていたことは現実逃避になるの？ ならないの？ 自分ではどう思う？

さき うーん…現実逃避になるかな…。(意見を決めあぐねている。)

宮田 気持ちって混じることあるから、こんな気もちもあるかもしれない、っていう言い方でもいいんだよ。完全な現実逃避なのか、そうじゃないのも混じっているのか。

さき 混じっているかな…。多分、そこに書いてあるように、なくしちゃったから、それが…何ていうの…受け入れられなくて、何ていうの、「ああ、まだある。」みたいな感じだろうけど、目をつぶっていたりして感覚が戻ってるから、「あるんじゃないかな。」って思っているのは、現実なんとか…。

宮田 現実逃避。

さき そう、現実逃避でもあるかもしれないし、ないかもしれないんじゃないかなと思います。

宮田 現実逃避とは言い切れない、ってことだね。

小林 現実逃避から出発したんだけど、こういうことを経て現実逃避ではなく…何なの？ 感覚が甦ってくるんじゃないかってことよね。

中川 だから現実逃避かもしれないけど現実逃避でないかもしれない。

龜山 実はこんなことをつぶやいていたんです。(本文提示)

長浜 この物語の中で、鶴次郎が実際につぶやいた言葉、読んでみます。

『おれの手は、なくなったのと違う。ただ空気のように、見たりさわったりできなくなっただけじゃないかしら』

瀬底 (本文③の朗読)

龜山 鶴次郎の左手はないの？ あるの？

C 本当はない。

龜山 本当はないんだね。じゃあこんなことを考えたって仕方ないんじゃないかな。

りく あるかもしれないし、ないかもしれない。

みお 自分ではあるんでしょ。

あき 自分から例えると腕はあるかもしれないけど、人から例えればないかもしれない。

龜山 でも本当にはないんでしょ。

あき だから、人からはないと思われるけど、自分の思っていること…自分ではまだ左手はあると思っている。

長浜 はい、今、続きの物語を読んでもらって、そこには鶴次郎以外に、二人の人物が登場してきましたね。その二人は誰と誰？

C さちよとおばあ。

長浜 おばあちゃん登場した？ 登場したのは看護婦さん。看護婦さんとさちよが登場しました。みんなは看護婦さんはどんな人を感じた？ 鶴次郎に接する時の看護婦さんの様子を見てどんな風に感じた？

なお やさしい。

長浜 どんなどころがやさしい？

なお 腕がないことを気にしないように。

長浜 腕がないことを気にしないように言ってくれているからやさしい。もう一人さちよが出てきますね。さちよは、この物語の中で鶴次郎にとってどんな人か、想像できる？

りく 妹かお姉ちゃん。

C お友だち。

C いとこ

長浜 ここでははっきりと鶴次郎との関係はわからないけど、鶴次郎ととても親しい人だということはわかるね。じゃあ、さっき看護婦さんは鶴次郎に対して気にしなくていいように優しい振る舞いをしてくれたって言うていたけど、さちよは鶴次郎についてどんな風を感じているのだろうか。

しお 鶴次郎のことを心配しているから、腕がないから大丈夫なのかな、って。

長浜 そうすると、さっきの看護婦さんの感じ方と同じなの？ 違うの？

みお 腕を気にしている。看護婦さんは気にしていないけれど、さちよさんは気にしている。

亀山 その気にしているという内容、もっと詳しくありませんか？

りく 最初の方に真面目な顔をして、って書いてあるから、心配していて…笑って入ったりしていると、腕のことを笑っていると

思われちゃうし、悲しい顔で入っていくと鶴次郎が僕の左腕は切り落とされちゃったんだということを思い出しそうだから、だからそういう心を傷つけたくないから、真面目な顔で入っていったから左の手のことを心配している。

長浜 看護婦さんは気にしないように、っていう気持ちで優しい言葉をかけているけど、さちよはそういう鶴次郎の左の手のことをまるで笑っているかのようなことをさせないように気をつけて心配している…そういう感じなんだ。

まい さちよは鶴次郎の親しい人だったから、左手がなくなつて変わっちゃった鶴次郎が心配になっちゃってる。

みお 左手がなくなつたことでさちよがショックを受けた。

長浜 今、この物語の中で鶴次郎の感じていること、そして一方でそばにいる看護婦さんやさちよがどう鶴次郎を受け止めたのか確認したんだけど、次の展開をみんなですぐから一緒に読みましょう。(朗読)

『鶴次郎は、それを見ると、……につこり笑いながら、(一)』

このあとどんな言葉が続くと思う？ 鶴次郎がどんなことをしたのか、あるいは言ったのか、自分で想像して書きましょう。

(プリント配付、しばらくして)

長浜 まだ途中の人もいるけど、発表できる人から発表してもらおう。

たかにつこり笑いながら、「右手は空気のように見たりさわつたりできないけど、右手はあるんだから大丈夫だよ。」とさちよに言っただけ。

長浜 どっちがあるから？

たか 左手は。

長浜 ない方の手だね。

てつにつこり笑ったあとに何も返せないと思う。何も言葉が出ないと思う。

宮田 どういう意味で言葉が出ないの？

てつ 腕をずっと見られていたら嫌だし、笑いながら前向きな発言ができない。

もか 心配しなくても腕は大丈夫だよ。

長浜 何が大丈夫なの？

もか 左腕は切られてなくなっちゃったんだけど、自分ではあると思っているからあんまり気にしないで…。

さと 大丈夫、さちよや他の人から見ると見えないけど、実はあるんだ。心配することはないんだ。自分にはしっかり左腕があるから。

から。

りく 「大丈夫、この左手は失ったんじゃない。ちゃんと神様の手はついてるんだから」って言うって、さちよが、ありもしないものがあるように言っていて、やっぱり変になっちゃったんじゃないかな、って

言って、けど、手が切れちゃってショックかと思っただけど、鶴次郎が立ち直って良かったな、って。

長浜 立ち直っているのをさちよは感じていると。

りく 今につこり笑いながら、って言ったけど、国語の授業でメールとかやっているのと、表情とかが自分がどう考えているのか分からない、っていうのをやって、やっぱ笑って大丈夫って思っているけど、心の中ではやっぱり現実には神様の腕だって実在しないんだって。

まい 大丈夫だよ。ぼくはみんなから見たら左手はないかもしれないけど、僕の手っていうのはあるし、さちよたちを遠いところへ連れていきたいから。

しお おれには目に見えない左手があるから、左手のことは心配しなくていい。

長浜 今、ないはずの左手を「ある」というふうに書いてくれた人と、逆に「ない」というふうに書いてくれた人がいますが、左手はあるんだという文章を書いた人はどのくらいいますか？ ちょっと手を挙げてみてください。（11人挙手）

じゃあ、実際に鶴次郎がこのあとのようにしたのか読みます。

（文面を掲示し朗読）  
どうですか…。この最後のところ、感想を

聞かせてもらいたいんだけど。  
てつ なんかポジティブすぎる。

（一部に笑いが出る）

長浜 思ったこと、感じたことそのままいいです。共感するなら共感するでもいいし、違うよっていうなら、素直に感じたことを教えて。

さき 私は最初の方はなんか「手がない、手がない」ということで、鶴次郎が何か焦っている感じだったけど、こっちの最後の方になって焦っている感じがなくなってきたので：焦っている感じがないから、なんかちょっと楽になったのかなと思いました。

宮田 何で焦っている感じが消えていったんだと思う？

さき いろいろな話：看護婦さんからの言葉とか、自分の夢について話せた事とかで、焦っている気持ちがだんだん小さくなってきた。

小林 言葉とか、自分の夢を語ることでね。

宮田 今「話せた」って言ったよね。例えば自分の夢を話せなかったらこうはならなかっただろうって感じ？ ひっくりかえして考えると。

さき それを言ったことによって、ちょっとすっきりした感じ。

宮田 言ったことによって、その後にすっきりという気持ちがあくついたら：そういう順

番ね。

くみ 最初は、なんかもう左手がなくなっ  
て、「ある」って言ったけど、みんなは「ない」って思ってた、でも、さちよもそれが分かってくれて：さきさんが言っていたように、言ったからさちよも：自分も鶴次郎も、なんか本当にさすっているように思えているし、さちよもやっぱ頭をなでられていると。

亀山 鶴次郎もさちよも感じた。

長浜 さちよも感じたんだ、なでられていることを。ああ、なるほど。

まり 私もさきさんと同じで、やっぱ始めは左手がないことが不安だったりしたと思うけど、看護婦さんとかにいろんなことを言われて、それで自分ではなんか楽になってきて、それで、さちよにもそういう：なでてあげたりして、鶴次郎の気持ちが、さちよも分かったの…。

小林 鶴次郎の気持ちをさちよが分かったのね。

まり で、うーん…。（言葉につまる）

小林 でも、その「うーん」分かるな…。

宮田 言葉にならない言葉ってあるからね。

長浜 この話を読む前の段階は、ない左手を、みんな何って言ってた？

C あると思った、感じた。（思いたかった）というつぶやき）

長浜 「あと思った、感じた」って言うって  
たんだよね。

中川 そういう風にはじめは本当に幻覚でも  
いいから左手があつて欲しいと…。

小林 認めたくなかったんだよね。(板書で  
いくつかの発言を確認しながら) このと  
ころをもう少し詳しくいつてくれるといい  
な。気持ちが楽になったつてどういうこと  
か、もう少し付け足してくれたらいいな。

長浜 何か付け足しの意見、言ってくれる？  
ここでは、「心配するな、おれの手はそら  
ちゃんとこんなにあるんだよ」というふう  
にその目にみえない手をさちよの方へ…み  
んなで読んで。

C 差し出した。

長浜 そしてさちよのオカッパ頭をそつと…  
C なでてやった。

長浜 すると左の手の平に、さちよの髪の毛  
が心にしみるように、しかと感じられた…  
というようにつながるんだね。ちよつと違  
うでしょ。さつきこつちで「あると思つて  
いた」っていうのとは。

中川 しかも最後の感想のところが「さちよ  
も頭をなでられていると感じられてる」つ  
て、そんなことここ(本文)には全然書い  
てないよ。

亀山 こつちは、「あつて欲しい」と思つて  
いた。こつちは…「ある」に変わつてい

る。「ない」けど「あつて欲しいな」…「本  
当はないけどあつて欲しい」が、「本当は  
ないけどある」。

瀬底 みんなは左手をなくすつていう経験は  
ないよね。だけどこの鶴次郎はなくしたこ  
とで、もつと新しい世界を知ることができ  
たわけ。で、「なくす」つてすごい絶望的  
なことなんだけど、もつと違う仕方でも再  
生できるんだよね。自分の手は…この手じゃ  
なくて…見えていつかなくなる手じゃなく  
て、なくなつたからこそ新しく、もつとす  
ごい手を受け止めることができた。だか  
ら、「人間つて再生するんだ」つておばあ  
ちゃんと思いました。

亀山 さつきこの「にっこり笑つて」つてい  
うのを「作り笑い」つて言いました。そう  
いう風に思つていてもいいと思う。だか  
ら、「まだ絶望したままだ」つて思つてい  
てもいいと思うけど、だけどさつきみんな  
ほとんどの人が「本当はないけど、ある  
よ」つて言えたというのも、それも本当。  
だからそれを知つていればいいかな、と思  
います。

※発言者の表記を次のようにした

- ・授業者……………漢字表記
- ・児童……………かな表記(名前は仮名)
- ・不特定の児童…C

## 8. 活動を終えて

○『それで、にっこり笑いながら』の続き  
(子どもたちの書いた作文から一部抜粋)

- ・左手は見たりさわつたりできないけれどあ  
るんだよ。大丈夫。
- ・心配しなくても、うでは大丈夫だよ。自分  
ではあると…。
- ・大丈夫、実はあるんだ。自分には、しっか  
り左手があるんだ。
- ・大丈夫、左手はなくなつたんじゃない。神  
様の手がある。

○イメージとしての身体を実感すること  
イメージとしての身体を実感すること(な  
いはずの左手があると実感すること)を授業  
の中でどう確かめることができるのだろうか。

本文2の場面を読んで意見を聞くところ  
で、ある子どもが、鶴次郎がないはずの腕  
を「あると思いたい」のではないかという発  
言をする場面があった。その子は、「現実逃  
避」という授業者の言葉で納得した。続いて  
別の子が、「見えない手を見つてしまうと現実  
に戻されてしまうけれども、目をつぶると感  
覚が戻ってくるから(あるんじゃないかな。)  
と思つて…」と発言する。この子は、「現実  
逃避かもしれないし、そうでないかもしれない

い」とはっきり言い切ることをためらった。

本文3の場面を読んで意見を聞くところでは、第三者として登場する看護婦とさちよが、鶴次郎の左腕がないことを心配したりなぐさめたりする姿を読み取ることで、それに対比するような形で鶴次郎の内面を考えることができたようだ。それは、「大丈夫、さちよや他の人から見ると見えないけど、実はあるんだ」「心配することはないんだ。自分にはしっかり左腕があるから」「僕の手っていうのはあるし、さちよたちを遠いところへ連れていきたいから」「おれには目に見えない左手があるから、左手のことは心配しなくていい」などという発言（ワークシートの作文）に表れている。

最後に、本文④を提示して感想を述べるところでは、現実を受け入れながら希望を失わない鶴次郎の姿を受け止める様子がうかがわれた。それは、「（鶴次郎は）最初は左腕をなくしたことで焦っていたかもしれないけれど、最後の方になって焦っている感じがなくなってきたので楽になったのかな」「はじめは左手がないことが不安だったと思うけれど、看護婦さんとかにいろんなことを言われて、それで自分ではなんか楽になってきて、それで、さちよにも…なでてあげたりして、鶴次郎の気持ち、さちよにも分かったのは…」などという発言に表れている。

このようなことから、イメージの身体を実感するということを、なくなった左手を「あると思いたい」という発言から「（他人には見えなくても自分には）ある」という発言に変わっていくという過程から察することもできる。

しかし、最後の感想で「最後の方になって焦っている感じがなくなってきたので楽になったのかな」と発言した子（さき）は、当初、表情が強張っていて、最初の方で書かせたワークシートには「左手はどこに行ってしまったのか。これから左手なしで生きていくのか。」と書いた子だった。その子が、最後の方で開放されたように先のような発言をしたことは、その子にとっての体感だったのではないかと信じたい。

（学習院初等科教諭）

## スナツプ 再掲③

3年生男子

12号

（だまらせて、学校めぐりをした後に書いた詩）

### 題「だまる」

心の中で、

「1、2の3、むっ。」

と、きあいを入れた。

しーんと、しずまりかえる。

きもちがわるい。

歩きながら、ろうかのかべに、

ほおをつける。

ふしぎだ。

いつもより、つめたい。

いつもより、気持ちいい。

だまっていると、みんなつめたい。

ろうかのかべも。

うわばきも。

かいだんも。

みんなつめたい。

だまっていると、心の中が、

今、そうじされているようだ。